

## 事前にお寄せいただいた質問にお答えします！

	質問	回答
1	<ul style="list-style-type: none"><li>・ PIとしての採用は御座いますでしょうか？</li><li>・ 研究員はどの程度自律的に研究を遂行できるか</li></ul>	PIという表現が何を意味するかにもよりますが、研究員であってもテーマを立案してチームを形成し実施という点ではPIと言えるかと思います。グループ（5名程度）の単位で研究者を束ねて研究実施するのはグループリーダーですが、課題の重点強化という意味でグループリーダークラスの採用もあります。若手の頃は育成の時期でもあるので、周囲の研究者と連携しながらサポートを受け、研究の経験を積むことが多いです。
2	<p>Are those with weak Japanese levels welcomed to work at AIST?</p> <p>Whether foreign researchers can apply for the position if their Japanese language level is not fluent yet?</p>	Although several non-Japanese are employed each year, administrative work within AIST is performed in Japanese, so it is better to have some Japanese language skills. AIST also provides an English version of the application form.
3	2024年9月卒業の場合、どのタイミングで応募するべきか	第1回の採用公募結果は7月ごろ決定しますが、その場合、最短で10月での採用が可能です。ですので、9月卒業予定の場合は第1回の公募に応募されると、ブランクなく着任も可能です。
4	キャリアを重ねるにつれ、どのように職務は変化するか	若手では先輩研究者による育成も経ながら研究実績を上げます。自分での課題選択や資金獲得の能力がついてくると自立した研究を実施、1年ほどの研究支援業務の経験を経て、能力に応じて研究グループリーダーとなり研究チームをまとめていきます。その後のキャリアは個人により多様化します。

5	<ul style="list-style-type: none"> <li>・大学における研究と産総研における研究の違いは何か（研究の方向性から研究生活まで）</li> <li>・研究所のなかでも産総研の特徴は何か</li> <li>・理研などの他研究所との違いは、どの点にありますか？</li> </ul>	<p>大学の研究との大きな違いは研究所のミッションです。産業競争力強化が大きな目標ですので、生命現象の追求が第一というアカデミックな大学の研究室というよりもエンジニア研究や応用につながる研究が主体であるところです。企業の研究所に近いかもしれませんが、また生命工学領域は拠点が5箇所に分かれています。研究方針に合わせた配置換えや拠点間異動もあります。さらに学生やポストドクもいますが、テクニシャンたちと共に研究する職場です。定年まで研究を継続するキャリアだけでなく、知財や連携などそれぞれの特性に応じた多様なキャリアパスがあります。</p>
6	<p>職務内容について、お教え頂けると嬉しいです。</p>	<p>主たる公募枠は研究実施をする研究員です。まずは産総研、研究部門、研究グループなど組織のミッションに沿った研究テーマを組織的にチームで研究します。場合によっては国プロジェクトの実施や民間共同研究のテーマ、所内プロジェクトの推進など色々あります。また、これまでの経験やスキルを活かした連携推進の業務や知財業務などのポジションの可能性もあります。</p>
7	<p>外国で働く研究者は応募することが可能でしょうか？試験や面接の流れはどうになりましたか？</p>	<p>外国で働く方の応募も受けております。生命工学領域では領域審査は原則対面で行っていますが、海外におられる方については時差を考慮した上でのウェブ面談で対応しております。領域面接の前にSPI試験を行います。こちらもウェブ上で実施しますので、問題ありません。</p>
8	<p>産総研では、プロジェクト研究がメインというイメージがあるのですが、どのようなエフォート分けで研究をされているのでしょうか。また、大学や他機関との共同研究に制限はあるのでしょうか。</p>	<p>プロジェクト研究もありますが、No.6に書いたように多様な研究課題を実施しています。大学や他機関との共同研究はそのチーム研究を推進するために行うという位置付けです。</p>

9	<p>植物の研究では、主に遺伝子の機能解析をされているように感じるのですが、栽培したりといった泥臭いこともできるのでしょうか。</p>	<p>植物の研究では遺伝子の解析は基盤ですが、それを活用した植物開発や栽培に向けた研究にも取り組んでいます。さらには社会実装という観点から今後も多様な植物の栽培に取り組んでいきます。</p>
10	<p>・どのようなことを研究している研究者がターゲットなのか、また、年齢層をターゲットにしているのか、などを知りたいです。          ・どのような研究分野で応募可能なのか・・・どのような能力や特徴を持つ人材を必要としておられるのか知りたいと思いました。</p>	<p>我々のミッションである、「バイオものづくり」「ヘルスケア」「生体高度分析」の柱に則した研究を実施できるかたがターゲットです。我々の持つ研究に強みを付加できる、また既に推進している課題にも貢献できる技術を持つ方々を求めます。年齢制限はありませんが、年齢層ごとに求められるスキルは多様です。若手のみならず、大型強化課題に対しては研究グループリーダーになっていただくような方を採用することもあります。</p>
11	<p>PhD取得後、所属としてはブランクがある状態になります。リスクニング等の支援は？</p>	<p>ブランクに対するリスクニングはありませんが、若手研究員の場合には周囲の研究者による育成期間がもたれますので、その中で新しい課題への挑戦やスキルの取得などは達成できると思います。異なる新しい分野の課題設定に対応できる柔軟さや挑戦をサポートします。</p>
12	<p>研究以外のタスクは、どの程度あるのでしょうか？</p>	<p>研究所ですので、研究に関わらない業務はほとんどありませんが、研究者によっては一部のエフォートを割いて連携大学院の教員として学生の指導をしている方や政府から要請されたガイドラインの策定などの業務を行っている方がいます。採用後、数年後には1年間研究支援業務や政府関係所管部署にて産総研の組織や政策のしくみなどを学ぶ時期があります。</p>

13	研究テーマに共同で取り組む研究者の人数	課題の大小に応じてさまざまですが、個人研究は実施しない方針です。チームとしては3～6人くらい、大きな課題では十人を超えたものもあります。領域を超えたチームもたくさんあります。
14	産休・育休の取得実績	産休はもちろん取得が必須ですし、育児休暇を取る方も増えています。長い方は1年以上とられる方もおります。産総研独自の産時休暇中や育児休暇中のテクニシャン支援や子育て支援策はいろいろあります。男性の育児休暇取得も増えてきました。 <a href="https://www.aist.go.jp/aist_j/information/diversity/index.html">https://www.aist.go.jp/aist_j/information/diversity/index.html</a>
15	<ul style="list-style-type: none"> <li>・研究者として生きていくのはどれほど大変ですか。</li> <li>・研究をやっていく中で、自分自身の工夫やアイデアなどは反映されやすいですか。</li> </ul>	研究者はどのような機関での職業としても大変なことは変わらないと思います。自分自身の工夫やアイデアが社会の技術として具現化されるチャンスがあることは産総研の醍醐味であるかもしれません。
16	採用されやすい人材と採用されにくい人材	新卒、中途は問いません。産総研では様々な研究課題が進行しています。時には民間企業の事業に即した新しい研究開発のミッションもあります。そのような多様な研究課題に対して、柔軟に対応しながら研究推進をしていくことができる人材が求められています。決まった研究課題しか研究できない、したくないという方はその課題が産総研として重点化しない場合、採用できないこともあります。
17	バイオメカニクス(モーションキャプチャー)に関連する領域の研究などがありますか。	健康医工学研究部門で歩行を中心にしたバイオメカニクス研究があります。また他の領域には実験や作業手技のモーションをロボットへ落とし込むためのメカニクス研究もあります。